保育者が認知する「気になる子ども」の行動特性と早期支援 —SDQに基づく調査からの考察—

Behavioral Characteristics of "Concerned Children" as Perceived by Caregivers for Early Support: A Study Based on the SDQ

福井 麻紀†, 西中 美和†
Maki Fukui, Miwa Nishinaka

†香川大学地域マネジメント研究科
Graduate School of Management, Kagawa University
makiron.ron.1221@gmail.com

概要

幼児教育の現場において知的発達の遅れよりも，落ち着きがない，集団に適応できないなどの行動特徴を持つ「気になる子」が増加し，保育者は対応に困難を抱えている．本研究では，保育現場においてどのような行動特徴を有する子どもを保育者が気になる子と認識し，どのような問題があるのかを明らかにする．それにより，対象児に合った支援策や方向性の契機とし，保育者の悩みの改善，また，早期発見・支援の実現に繋げる．

キーワード：幼児教育，教育心理，気になる子，SDQ

1. はじめに

近年，保育現場，幼児教育の現場において保育者は，気になる子どもの対応に困り感を抱えている[1]．「気になる子ども」の行動には「話を聞けない」，「多動で落ち着きがない」，「注意がそれやすい」，「きれやすい」，「集団生活が苦手・適応できない」，などが特徴的に挙げられる[2]．幼稚園や保育所の保育者が「気になる子ども」という言葉を使う理由は，子どもが乳幼児であるため，障害かもしれないが診断がついていない場合や，子どもが示す気になる行動が障害によるものか，環境のためなのかが分かりにくい場合が多いためである[3]．また，気になる子どもという言葉で表現される内容は保育者によって異なることが指摘されている[3]．

厚生労働省(2017)[4]は，学齢期にあらわれてくる二次的な不適応を防ぐために，幼児期のうちに保護者や保育者などが，子どもの特性に気づき適切な支援策を講じるという早期発見と予防的介入を推奨している．

特別支援教育とは，障害のある幼児・児童・生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち，子ども一人ひとりの教育的ニーズを把握し，その持てる力を高め，適切な教育及び必要な支援を行うものである[5]．「気になる子ども」の問題を具体的に理解し，仮に障害がある場合，個々の教育的ニーズを把握し，早期発見・早期支援に繋げることは，この観点に立つと考えられる．国は，１歳半健診・３歳児健診などで，このような問題に取り組んではいるものの早期段階での見極めは容易ではなく，幼稚園・保育園などでの集団生活において問題が生じている．そこで，保育者が早期発見をどのように行い，早期支援に繋げるのかが課題となる．

そこで本研究では，保育現場においてどのような行動特徴を有する子どもを幼稚園の保育者が「気になる子ども」と認識し，「気になる子ども」がどのような問題を抱えているかについて明らかにする．

気になる子どもの行動特性を調査するために，Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) を採用した[6]．これは，軽度の発達障害の幼児期から就学期の子どもを対象にした，厚労省の推奨する簡易行動スクリーニングツールである．このツールを用い，保育者に対するアンケートを行った．この実態調査の分析結果より，提言を行い，その子に合った支援策や方向性を見つけるための契機とする．

2. 先行研究

SDQは，Goodman(1997) によって開発された幼児期から就学期の行動スクリーニングのための質問紙法であり，ヨーロッパを中心に世界各国で用いられその信頼性と妥当性も確認されている[7]．刑部(1998)[8]では「気になる子ども」の特徴が保育者や子どもたち，および保育実践全体に関わる多様な他者との複雑な相互作用の中で作り出されているとする．また，京林(2019)[9]は，保育所において保育者が気になる子と認識する子どもはどれくらいいるのかを把握し，どのような行動特性を有するこどもを保育者が「気になる子ども」と認識しているのかを明らかにするため，保育者

による SDQ の評定を分析している．久米・松本(2018)[10]は，気になる子どもの早期発見・早期支援を目的とし，SDQ の質問紙調査をもとにして，保育者が子どもたちの気になることを調査し，性別，園別に分け数値をそれぞれ比較し検討した．

西村ら(2010)[11]は，SDQ の質問紙調査結果より，多動・不注意が高い数値を示したことから，保護者に比べ保育者は，多動の問題に注目しやすい傾向にあるという知見に一致し，このことから，「気になる子ども」の特徴として，集団生活の場では内在化の問題よりも外在化の問題が多いとしている．久米・松本(2018)[10]は，内在化の問題には，何かあると自分が悪いと思い心配になる，不安な思いが強いなどが含まれ，情緒的な問題を内在化の問題としている．外在化の問題には，落ち着きがない，衝動が抑えられない，乱暴な行動が多い，嘘をつくなどの行動が含まれ，環境との関係における問題を外在化の問題としている．しかし，野村(2018)[12]は保育実践において大切なのは子どもの内面に目を向けた「保育的な関係論の視点」だと述べている．

岩坂ら(2010)[13]は，特別支援教育に関する研究および地域の関係諸機関との連携の一環で，奈良市における発達障害早期総合支援モデル事業(2007～2008)の計画と実践にあたり，SDQ によるニーズ調査および分析をしている．本郷ら[14]は，障害の診断の有無とは関係なしに，顕著な知的なおくれがないにもかかわらず，子ども同士のトラブルが多い，自分の感情をうまくコントロールできない，多動であるなどの行動特徴を持つ子どもを保育者が気になる子どもと定義している．そのうえで，保育者に対する質問紙調査に基づく研究(本郷ら 2003)[15]では，気になる子どもの行動特徴に加えて，子どもの年齢や子どものおかれた環境を考慮することの重要性や，保育者自身のストレスを軽減させるような支援の重要性について指摘している．これら SDQ を活用した先行研究は蓄積されてはいる．また，「保育的な関係論の視点」[12]の重要性の指摘はあるが，保育者の現場の意見に基づいた実践に対する支援は明らかにされていない．

3. 研究方法

本研究では，京林(2019)[9]のモデルに基づき，SDQ を用い，行動スクリーニングから困難さに関する下位尺度（情緒の問題・行為の問題・多動/不注意・仲間関係の問題），強みに関する下位尺度（向社会的な行動）の値を調査する．それにより，どのような支援が必要なのか，また総合的困難さをどれくらい抱えているのかを明確にする．それにより，どのような行動特性を有する子どもを保育者が「気になる子ども」と認識しているのかを明らかにする．また，保育者による気になる子どもへの支援や関わり方，問題や悩みについて質問紙を作成した[9][16]．

SDQ は，5 つのサブスケール（情緒の問題・行為の問題・多動/不注意・仲間関係の問題・向社会的な行動），計 25 項目から構成され，3 件法により評定する．それぞれのサブスケールの得点（10 点満点）と，情緒の問題・行為の問題・多動/不注意・仲間関係の問題の 4 つのサブスケールの得点を合計した合計困難得点（Total Difficulties Score；40 点満点）を算出し，その得点から支援の必要度を「Low Need：ほとんどない」「Some Need：ややある」「High Need：おおいにある」の 3 つで判定する．

本邦では子どもの行動評価尺度で標準化されているツールが少ない中，よく使われている CBCL（Children Behavioral Checklist）は，質問数が多く，かつ「問題行動」に焦点を置いているため，採点者側に「悪いところに目が向く」と抵抗が見られやすい．その点，SDQ は子どもの「強いところと苦手なところ」双方に目を向けているので受入れやすい．保育者が約 5 分でチェックすることが可能で，CBCL との相関関係も報告されており，その有効性は高いと思われる[7]．

本研究では事前調査として，5 名の保育者に質問紙による調査を行い，その結果より質問事項の修正を行い，より具体化できるものへと作成した．アンケートは 2 部構成になっており最初の部は SDQ そのものを用いた．2 番目の部は，上述の SDQ に基づいた質問項目を作成した．これにより「気になる子ども」の行動を SDQ とアンケートによって明らかにし，それに対する保育者の対応方法を検討する．これにより，保育者が子どもをどのように支援すべきかを検討する．調査用紙は 2021 年 9～11 月に，香川県高松市内の私立幼稚園 37 園へ 165 部を配布し，保育者に回答を依頼した（回収率 100%）．

回答項目は，SDQ による分析に加え，さらに回答に対して因子分析を行うことで特徴を分析した．また，アンケートの自由記述文に対しては，KH coder (https://khcoder.net/) でテキストマイニングを行い，具体的な内容を把握した．

４．分析結果

結果として，SDQ の調査からは，性別では 165 人中 128 人（78%）が男児，37 人（22%）が女児であった．年齢別では，3 歳児 48 人，4 歳児 61 人，5 歳児 40 人，6 歳児 16 人という結果から，年齢が上がり，4 歳 5 歳ごろになると，「気になる子ども」の行動が保育者の目に留まりやすい傾向にあることが示唆された．

スクリーニング尺度であるサブスケールごとに見ると，高い数値は，多動・不注意（71%），仲間意識の問題（10%），情緒の問題（8%）であった．また，因子分析の結果からは，多動の中でも自己中心的で，人間関係に問題を抱えている子どもが多いことが分かった．

保育者の対応の仕方に関しては，保育者は，子どもたちの思いや声に寄り添い，受入れ，認める支援をしており，一人ひとりの子どもたちをよく理解しているということが分かった．早期支援に繋げるためには，専門機関と連携し継続的な支援を受けたいという意見が多かったことから，幼稚園等関係機関と専門家や専門機関を繋ぐ取り組みが重要になる．そして，情報交換，情報提供することで知識や対策法について高め合うことで，保育者の資質の向上に対する必要性も見えてきた．

Khcoder の分析からは，3 歳児は安心し落ち着いて取り組めるような視覚的支援，４歳児は子どもの気持ちを受け止め寄り添いながら一緒に取り組む支援，5・6 歳児は興味や関心を持ちながら，見通しを持って取り組めるような支援に目を向ける取り組みが効果的であることが分かった．

５．考察

5.1. 分析結果からの考察

今回の調査から，性別では，男児が多く，スクリーニング尺度からの SDQ サブスケール分類では，多動・不注意の数値が 71%と極めて高く見られた．

子どもの外在化の問題は，男児に出現率が多いとされ[11]，その特徴として今回の調査からは，多動性・衝動性・不注意優勢型の割合が多く，保育の現場でも，落ち着きがなく保育中などでも歩き回る，落ち着いてじっと座っていることが苦手，衝動が抑えきれず，ちょっとしたことでも大声を出す，遊びや活動が続かない，乱暴にしてしまいトラブルも多い，反抗的だと捉えられやすい，といった行動の問題が多いことが分かった．集団生活の場では，内在化の問題よりも外在化の問題が「気になる子ども」の特徴になっていると思われる．

以上の具体的な行動の問題を理解することに加え，「気になる子ども」に対する保育者支援の有効事例を重ね合わせることで，多動・不注意に対してどのようにかかわりを持つかを考えることができる．今回の保育的な関係論の視点[12]調査では，以下が重要であった．

3 歳児では，初めての集団生活でもあるため，保育者との信頼関係を築きながら，安心して園生活が過ごせるようスキンシップを十分にとる．子どもの声をしっかりと聞き，理解する，指示をする時は，たくさんのことを一度に指示するのではなく，具体的に分かりやすく一つずつ伝えるようにする．個別指導や視覚的情報を得やすいよう，絵やイラストのカード等を使用し伝える．4 歳児では，子どもの気持ちを受け止めながら，子どもの声や思いを聞く．全体での指導が難しい場合は一対一でかかわり十分に時間をかける．言葉が理解できない時は，視覚的情報を得やすい絵やイラスト，絵カード等を使用して伝える．また，子ども自身も絵カードを使用して自分の意思を伝えやすくする．友だちの思いを少しずつ伝えながら相手の思いに気づけるようにする．5 歳児では，見通しを持って取り組めるよう，一日の流れや，活動の流れを伝える．子どもの思いに寄り添いながら，興味や関心が持てるような配慮を行う．子ども自身とルールや目標をつくり，そのルールや目標が納得できるものであれば，ルールを守る約束をする．その目標が達成できたり，守れたり，実践できた時は，しっかりと褒め，ごほうびリスト的なもので達成したことが目に見えて分かるようにすることで達成感や認められたと感じることができ，自己肯定感へと繋ぐことができる．

保育現場で，保育者が男児に多動・不注意が多くみられる傾向にある特徴を理解しておくと，支援策を前もって考えることができ予防的対応ができると思われる．４・５歳児の指導をする上において保育者が意識していることから，仲間関係や情緒の問題が年齢と共に高くなっているとも考察できる．

また，幼稚園教育要領の幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として，10 の項目があげられている[17]．その中からも共同性，道徳性・規範意識の芽生え，社会生活とのかかわり，思考力の芽生え，豊かな感性と表現などがあり，重要となるのが社会生活の中で必要となる思考力や判断力，コミュニケーション力の基礎となるものであり，幼稚園生活での遊びや体験を通して身につけることが幼児教育の基準とされていることからも，経験することから子どもたち同士で解決策を見つ

け出すことができるような支援策の取り組み. また, 自分の思いを言葉で表現できない子どもたちが増えているため, 日々の活動や遊びを通じて, 自己発揮できる力を身につける取り組みにも重要となる.

5.2. 関係機関への提言

幼稚園や保育園, こども園は, 集団の中で個に応じた保育をするところである. しかし, 「気になる子ども」の概念が明確でないため, 園や保育者によって「気になる子ども」の認識が過剰, あるいは過少になったりしないよう, SDQ の活用などを含め園や保育者間で子どもの発達の見方を共有する仕組み作りが求められる.

今回の調査から, 専門機関や専門家との連携を継続的に行いたいと保育者は望んでいることがわかった. そのためには, 幼稚園・保育園・子ども園等関係機関と専門家や専門機関を繋ぐ取り組みが重要になってくる. 幼稚園等関係機関同士が連携を持ち, 情報交換, 情報提供することで, 知識や対策法について高め合うことができることから, 保育者の資質の向上に対する効果もある. 各園で孤立してしまうのではなく, 地域や自治体, 幼稚園等関係機関が協力し合い「子どもたちを育てる」という意識付けをしていくことが重要なのではないかと考える.

6. まとめ

本研究では, 幼児期からの「気になる子ども」を, 早期発見・早期支援するために, 保育者は「気になる子ども」どのように理解, 認識しているのかを明らかにし, どのように子どもたちを支援していくかを, SDQ の質問紙とアンケートにより調査し考察した. 結果より, 保育現場での実態を関係論の視点から明らかにし提言をまとめた. 本研究の制約としては, 香川県私立幼稚園のみの調査であることが挙げられる. 今後は, 香川県公立幼稚園や保育園, こども園にも依頼することで, 保育者の様々なニーズに応え, 専門家の指導を仰ぎながら気になる子どもへの支援策のマニュアル化の実現と共に, より一層, 各幼稚園等関係機関の向上に繋がるよう, 早期支援の方策の研究をさらに深めていきたい. 更にアンケート調査より, 小学校との連携に悩んでいるという意見もあったことから, 保育者側, 小学校教諭側, 双方の専門性や思いを活かす形での幼小連携のありようについて, 具体的な事例に基づき考察する必要性がある. その上でスムーズな支援が実現可能となり, 生活しやすい適度な環境設定ができる連携の推進を図りたい.

文献

[1] 郷間英世, 圓尾奈津美, 宮地知美, 池田友美, 郷間安美子(2008) “幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究”京都教育大学紀要, Vol.113, pp.81-89.

[2] 池田友美ら(2007) .“保育所における気になる子どもの特徴と保育士の問題点に関する調査研究”小児保健研究, Vol. 66, no. 6, pp815-820.

[3] 久保山茂樹・斎藤由美子・西牧謙吾・堂島茂登・藤井茂樹・滝川国芳(2009).“「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査－幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言”－国立特別支援教育総合研究所研究紀要第36 号, pp.55-75.

[4] 厚生労働省(2017.4.9).“軽度発達障害児に対する気づきと支援のマニュアル” https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/boshi-hoken07/h7_01.html. (Accessed on 2023/7/2).

[5] 高橋陽一, 伊藤毅編(2016).“新しい教育相談論”武蔵野美術大学出版局.

[6] Goodman R. (1997). The Strengths and Difficulties Questionnaire: A Research Note, *Journal of Child Psychology and Psychiatry, Vol.* 38, pp.581-586.

[7] 岩坂英巳, 松浦直己, 八木英治, 前田由美子, 根津智子(2010).“教師版 SDQ を用いた 4-5 歳児の特別な支援ニーズ調査-地域と連携した特別支援教育早期支援の取り組みの出発点として”教育実践総合センター研究紀要, Vol. 19, pp114-115.

[8] 刑部育子（1998）.“「ちょっと気になる子ども」 の集団への参加過程に関する関係論的分析, ” 発達 心理学研究, Vol. 9, no.1,1-11

[9] 京林由季子(2019).“「気になる子」の行動特性に関する保育者の認識—SDQ を用いた検討,” 岡山県立大学保健福祉学部紀要第 26 巻 1 号, pp.97-103.

[10] 久米紗生・松本有貴(2019).“保育者の「気になる子」の早期発見・早期支援のために一簡易質問紙によるスクリーニング (SDQ) の有効性の検討,” 文理大学研究紀要第 96 号.

[11] 西村智子, 小泉令三(2010).“日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire(SDQ)の保育者評定”福岡教育大学紀要, Vol.59, no.4, pp.103-109.

[12] 野村 朋(2018).“「気になる子」の保育研究の歴史的変遷と今日的課題”保育学研究, Vol. 56 巻 3 号, pp. 70-80.

[13] 岩坂英巳・松浦直己・八木栄治・前田由美子・根津智子(2010).“教師版 SDQ を用いた 4-5 歳児の特別な支援のニーズ調査—地域と連携した特別支援教育早期支援の取り組みの出発点として” 教育実践総合センター研究紀要, Vol.19, pp.113-117.

[14] 本郷一夫(2008).“『子どもの理解と支援のための発達アセスメント”有斐閣選書.

[15] 本郷一夫他(2003).“「保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究」” 『発達障害研究』第 25 巻第 1 号, pp.50-61

[16] 金山美和子(2016). “「気になる子ども」「気になる保護者」の理解と支援・子育て支援者と保育者の専門性に着目して”長野県短期大学紀要 70 巻.

[17] 文部科学省(2016). “幼稚園教育要領解説” フレーベル館.